

第七章
「IT新市場」におけるアジャイル開発に取り組む富士通の挑戦

富士通におけるアジャイル開発は、2003年頃から草の根的にSI現場の一部やパッケージ開発など小規模に適用されてきた。現在は、共通技術部門（富士通標準プロセス、SDEM推進部門）からアジャイル開発ガイドブックが公開されるなど、比較的大きな規模でもアジャイル型の開発手法が採用され始めている。これまでシステム化の対象として富士通で取り組んで来なかった領域において、アジャイル開発を実践した事例として特徴的な「どうぶつ医療クラウド」プロジェクトを中心に、富士通の取り組みについて紹介している。

新たな分野への取り組みと「どうぶつ医療クラウド」システム開発

富士通はクラウド技術を活用した新たな取り組みとして、農業、在宅医療、動物医療など、従来富士通が取り組んで来なかった領域へ参入している。これは、ITの活用があまり進んでいない市場に対して、クラウドやモバイルなど最先端のIT技術を活用したビジネスを推進するもので、実証実験では、業界のキーマンやパートナーと組み、現場のIT化と業界のイノベーションを目指している。

これらのフィールドには情報システム部門などは存在せず、担当者はメインの業務を持っており、彼らにIT業界の開発プロセスや用語などは通用しない。担当者にドキュメントから完成物を想像してもらうことは期待できないし、PCを使える環境に無いことも普通である。実証実験のパートナーとなるキーマンたちは、すごいスピードで業務を成長させながら生き残りを模索しているが、富士通には現状そのフィールドでのノウハウが圧倒的に不足しているというのも事実だ。この状況は、従来、富士通が得意としてきたSI事業における現場とは大きく様子が異なっており、一般的なシステム開発に比べて圧倒的に不確実な状況での開発となる。

そのような新領域「IT新市場」への取り組みの一つとして、動物の医療を扱うプロジェクトが立ち上がった。ペットの「家族化」が進む中、病気や怪我の予防、夜間の救急診療など、動物医療の質の向上が求められている。「どうぶつ医療クラウド」は動物病院間の連携や飼主への情報公開など、クラウドを活用したサービスの立ち上げを目指すものである。実証実験は、東京の開業医が中心となって設立した夜間救急病院とタッグを組んで取り組みを開始した。これまで富士通には動物医療の経験は無く、獣医師たちも具体的なイメージは持っていない状態でプロジェクトはスタートした。

システム開発チームは、XPをベースとしたアジャイル開発経験を積んできたメンバーを中心に構成された。現場への適用をスムーズにするため、手元のクライアント側は通常のブラウザより表現力の高いRIA（Rich Internet Applications）やスマートフォンやタブレット端末などのスマートデバイスへの対応が重視された。またデータ処理を行うバックのサーバー側はクラウドの利点を最大限活かすべく、ほかのプロジェクトでも利用可能なBaaS基盤（Backend as a Service）を目指した。サーバー側はデータの格納／検索、認証／アクセス制御のような機能をREST API¹⁾によって汎用的に利用可能にし、実際に「在宅医療クラウド」などのプロジェクトでも採用されている（図7-1）。上位のアプリケーションは、長くとも一ヶ月に一度のリリース間隔を維持した。このように、開発チームには、ビジネス側の要求に柔軟に応える、また、最先端の技術を適用していくことが求められた。

¹⁾ RST：Representational State Transfer[®] Webサービスの標準APIの形態。httpリクエストによって呼び出されるシンプルなインターフェイスをアプリケーションに提供する。

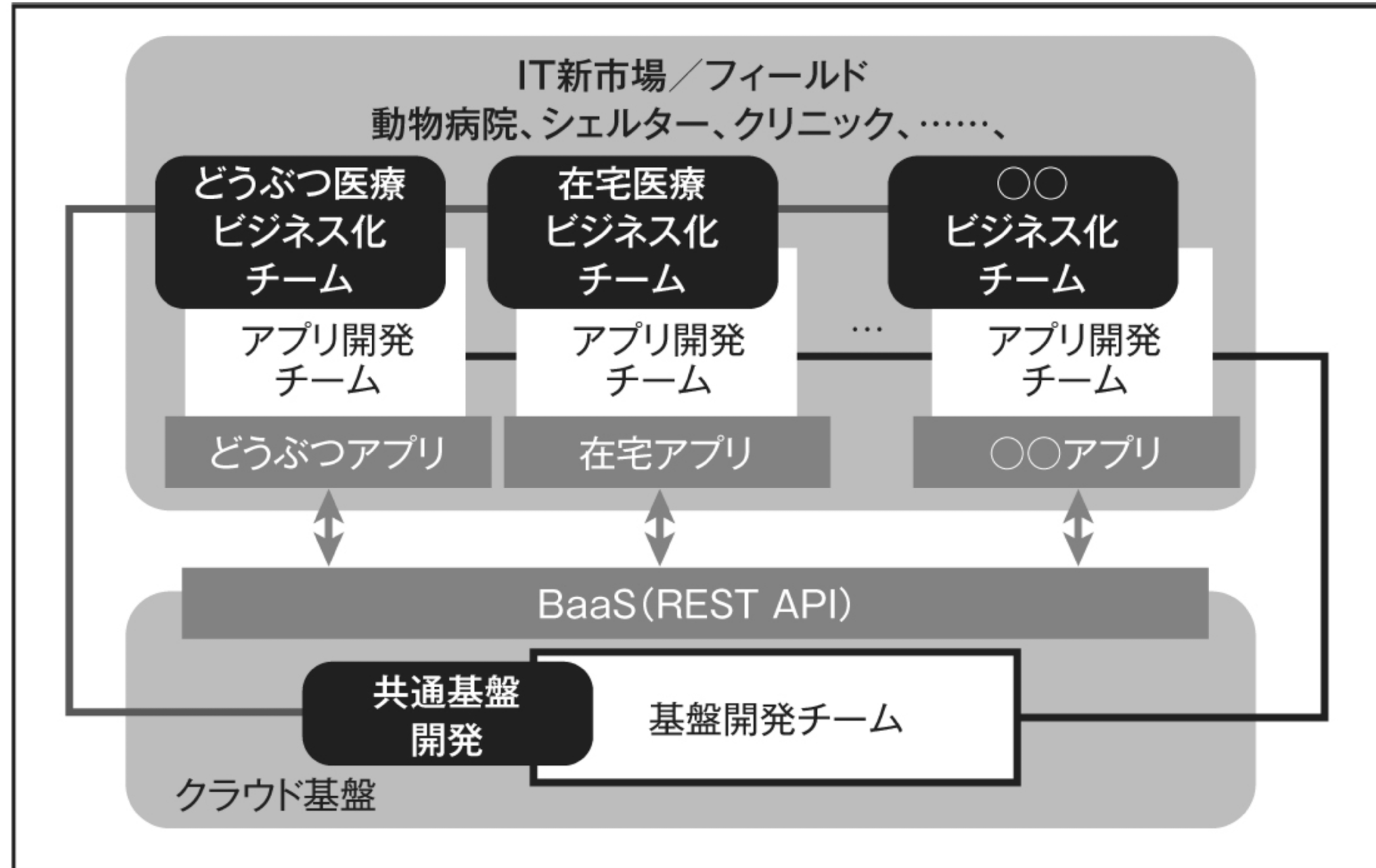


図 7-1 基盤チームとアプリケーションチームの体制

現在このプロジェクトには「在宅医療クラウド」チームも含め、静岡の開発拠点を中心に、蒲田、新横浜に分散して約50名のメンバーが在籍している。

アジャイル開発の実際

このプロジェクトは、アジャイル開発手法のXPを基本に実施された。利用したプラクティスは、「反復（イテレーション）」「ソースコードの共同所有」「ペアプログラミング」「継続的インテグレーション」「頻繁なふりかえり」などだ（[172](#)ページ、[図7-2](#)、第四章[107](#)ページ、コラム「XP（エクストリーム・プログラミング）」参照）。

しかし、実際には人数が多くなるにつれて標準のプラクティスのみではうまくいかないことがわかってきた。以降は、実際に行った独自の工夫について紹介したい。

